

戦後思想史再考

司会：初見基(日本大学)

報告者：三島憲一(東京経済大学)、中野敏男(東京外国語大学)

世話人：中野敏男(東京外国語大学)

I. 企画趣旨 ——本セッションは、つぎのような趣旨に基づいて企画され、実施された。

冷戦崩壊から20年、ポストモダンや「大きな物語の崩壊」が言われ出してから30年、ベトナム戦争反対や全共闘運動から40数年、日米安保反対闘争からほぼ50年が経とうとしているが、それを踏まえて21世紀になった頃から戦後の思想史をさまざまな角度から検討する動きが目立つ。

大塚史学とマックス・ヴェーバーの特定の解釈が一世を風靡した50年代から60年代は、またマルクス主義のさまざまなヴァリエーションが社会科学だけでなく、文学部系の学問の中でも大きな力を揮っていた。他方で、広義の実存主義的メンタリティも古典的人生論と一緒に文学部系では「隠れたカリキュラム」を支えていた。「いかに生きるべきか」という問いは、文学や思想に向かう学生にとってはあたかも自明の問いであるかのようにだった。

そうした中で、分野を越えて共有されていた基本的な思考形象は、「日本の遅れ」「日本社会の前近代性」であり、「日本と西欧」「日本と西洋」であった。今から見れば最も「前近代的な」要素を宿していた旧制帝大の講座が、そこで習う西洋の知識も含めて、近代的であり、西欧的であると思われていた。東京大学に入って近代とヨーロッパに近づくという点では、明治42年の三四郎のパターンが生きていた(もちろん、それへの批判も含めて)。

また「日本と西欧」という図式は、ある種の文化本質主義を宿しながら、一部の知識人を除けば、アジアと日本、日本とアジアという視点、そしてアジアにおける日本の過去という視点を生みにくくしていた。あるいは、それがあった場合には、アジア・アフリカのナショナリズムに今から見れば滑稽なまでの思い入れがなされた。また、この図式はサルトルやハイデガー、ヴェーバーや、後にはフランクフルト学派の受容の場合にも潜在的に生きていた。例えば近代化と近代批判の二重戦略を取る西欧主義者にそれは現れている。一部の西欧派がアジアにまったく関心を持たない現象は今でもいたるところに見受けられる。逆に日本経済が一定の段階に達すると、日本礼賛論に逆転し、ハイデガーや現象学を利用して、日本の伝統を解術し、「日本はもともとポストモダンだった」とするような議論も80年代以降見られるようになった。比重が逆になっただけで「東と西」という図式に変わりはない。

その他さまざまな問題が戦後思想の再検討にあたって潜んでいるが、実際には個々のテキストと議論の丁寧な再検討を何回か継続的にやりたい。

II. 報告 ——企画趣旨に基づいて、つぎのような二つの報告がまずなされている。

第一報告 三島憲一：和辻哲郎の象徴天皇論

1945年敗戦の年の末に書かれた和辻の象徴天皇論は、戦後の日本での多数派が支持する象徴天皇

制を先取りしたものとして注目にあたいる。和辻によれば、平田神学や戦時中の神懸かり的天皇崇拜とは無縁の本来の文化的な天皇制に敗戦によって戻るのだ、ということである。

ここに戦時中の議論との微妙なずれを見るか（古川哲史）、「ブレはない」と見るか（熊野純彦）、あるいは、『倫理学』に隠れた転換を見て、「スキャンダル」と形容する見方（子安宣邦）を転用できるかが問題となる。たしかに戦前の和辻の日本文化論にも象徴天皇制を先取りする議論があったことも事実だからである（刈部直）。しかし、全体として報告者は、少なくとも戦時中の議論と比べるとトーンの変化は無視できないと考える。しかし、その由来を事態の変化への適応と見て、「変節」を云々するだけでは生産的でない。大きく概念装置を変えないまま、トーンの変化を成し遂げることが出来た背景には、大正教養主義に固有の、ドイツ観念論用語のエピゴーネン的使用があったとみたい。ドイツ観念論、特にヘーゲルの怪しげな継承が目立つ。「国民的生の全体性」といった用語がそれである。しかし、どれだけヘーゲルのラジカルな歴史意識を継承していたかは疑わしい以上のものがある。ヘーゲルは、過去の宗教的像や聖画を見ても、われわれは美しいと思うだけで、われわれはそれに跪拝することはないと、きわめて覚めた意識を書いているが、古寺巡礼をする和辻は、仏像の前にひっきりなしに跪いている。跪きの旅行である。これはヘーゲルがロマン派に批判したものである。

しかし、ヘーゲルの歴史意識やナショナリズム批判を理解しない、ドイツ観念論のエピゴーネンたちの国民文化論的傾斜は19世紀後半のドイツにも珍しくなかった。その点で和辻も例外ではない（つまり、東西比較論により、ドイツの議論を理解できない日本人という説明はナンセンスである）。

こうした議論は、ゲーテとニーチェを同じ深い人間性で捉える初期の議論から一貫している。戦後の象徴天皇制にある、高天原の神々の河原の会議と戦後の議院内閣制との同一化といった知的混濁もおなじようなところに根があると見たい。

第二報告 中野敏男： 竹内好と「アジア主義」という問題

敗戦直後の日本の思想状況が「ナショナリズムの不在」として出発した事実を指摘したのは丸山眞男だった。竹内好はその点について「ナショナリズムとの対決をよける心理には、戦争責任の自覚の不足があらわれている」と喝破したが、その中であえてこのナショナリズムの問題を早くから提起した点で、この丸山と竹内は戦後思想史にとってやはり特別な存在と認めなければならない。

もっとも、この丸山と竹内とでは、日本近代のナショナルなあり方について、それを捉える問題構成に際立った差異があることは明らかである。すなわち、前者では「西欧の近代と日本の近代」として捉えられた問題が、後者では「中国の近代と日本の近代」という視角から捉えられていて、ここに竹内における「アジア主義の再評価」という問題が始まる。そしてここには竹内における文明一元論への批判があり、折から始まった第三世界の独立への期待とともに近代という時代の別様な可能性を問う視角が開かれていると見える。そうだとすれば、これは戦後思想の別様な可能性を探る道として注目に値する。

とはいえ、竹内その人のアジア主義再評価の探求をさらに立ち入って検討してみると、それは岡倉天心の思想と宮崎滔天の心情のすれ違いという認識に行き着いているのだが、そこでは、福沢脱亜論的な文明一元論への批判はあっても、岡倉にもなお維持継続されている文明論（アジア主義的に変奏された文明論）そのものへの批判には進み切れていない。そのように竹内ですら「文明論」という枠組みを脱していないという、このあたりに戦後思想の総体が抱える限界点も認められるのではないかと。

Ⅲ. 討 論 ——報告から出発してなされた質疑と討論はつぎの通り

三島報告については、ドイツ観念論のエピゴーネンは日本の近代知識人の基調であるというなら、その例外はあるか、という質問があった。これに対しては、やはり戸坂潤などは、シュライエルマッハーの解釈学も論じながら、マルクスのテキストも論じることで、上記の陥穽に陥らなかった数少ない例外と考えるとの応答があった。また中野報告に対しては、竹内好も文明論という陥穽から自由ではなかったというなら、日本の思想がここから自由になれる道はあるのか、特にそこでのマルクス主義など社会理論の認識枠組みの可能性はと問われた。これに対しては、一方でカルチュラルスタディーズ的な文化コード読解の乱用と他方でそれに反発する歴史学の実証主義への本卦還りがすれ違っている現状では、マルクスやヴェーバーなど社会理論の役割の再認識がとても重要であり、戦後思想についてもこの観点から再検討することに大きな意味があるとの認識が示された。

このような質疑からさらに、戦後思想史を総括する視座や方法についての議論がさまざまに展開された。とりわけ、日本の戦後思想史を考えるというときにも問われるべき「外からの視線」、同時代のコンテクストのメタコンテクスト的な広がりについて留意する発言などがあった。

Ⅳ. まとめと展望

今回のセッションは、40名ほどの参加者を得て行われた。

戦後思想を問い直そうという長期的な試みの第一回目として、いきなり「戦後思想とは」といった大風呂敷を広げるのでなしに、和辻、竹内それぞれに内在したかたちで、その思想の方向性としてはまったく異なっているにもかかわらずそれでも両者に観察される文明論的な陥穽が指摘され、今後への第一歩となったかと思う。

今回のセッションを反省的に捉えたうえでの今後の課題としては、現在といういわば「メタ」的な立場から過去の思想に批判的に向かうのはある意味で容易ではあるが、そこから何を救出してこられるのか、——護教的に「こういう良い面だってあった」というようなかたちではなく——これまで注目されてこなかったような積極面を見いだしうるのかどうか、意識して進めても良いだろう。

一人の個人でできる作業は限られているので、「社会思想史学会」という学際的な場を活かすようなかたちで、さまざまな角度から戦後思想を検討してゆくことが、私たち自身の硬直化をも防いでくれるだろう。実証的な歴史研究は進んでいても、それが思想史とほとんど接点を持たないという学問状況のなかで、「思想史」研究そのもののあり方をつねに捉え返しながら作業を進めてゆくことが重要である。

そこで、今回は、個人研究スタイルよりも、戦後の西欧と日本の議論の共通性と異質性、戦前との連続性と非連続性に焦点を当てた報告を考えてみるのも一案だろう。

以 上